理学部
評論
第6号　1978・6・25

できごと

1977年 2月17日：理学部長選挙，一般投票の結果，過半数で林忠四郎教授が選出され，教授会で確定。

3月14日：評議員選挙　参考投票　香月，亀井，町田，山口，浅井教授等の順。

3月15日：協議会で香月教授（先任）および，山口教授(後任)が選出される。

6月18日：評議会竹本助手の分限処分を決定。

6月24日，30日：学部長，評議員，処分問題で学生と交渉。

11月15日：林部長，学生集団に時計台前へ連行され追究をうける。

11月19日：総長選挙。岡本総長再選される。

12月～1978年2月：京大における授業破壊，建物占拠，暴力行為に内外から批判。

「助手定数の講師定数への振り替え」について

1975年，日教組大学部が「助手の講師振り替え」(以後「振り替え」と略記)の運動を提起して以来，現在では多くの大学において検討されてきている。当理学部においてはむしろ遅きにすぎる気配さえ感じられる。この問題は単純に「相対的に講師の数を殖す」ことではない。もっとも矛盾が集中している助手の問題であることを明確にし，その法的措置と学部における人的構成に主眼をおいて論ぜられるべきものと思われる。そこで，まず職員組合の基本的考えを明らかにしながら，最後に筆者の私見を加えて，当学部における論議に資することを期待したい。

I　基本的考え（要約）

（日教組大学部。1975．5．19）

（一）要求の背景

全国国立大学には1万5千余名の助手が存在し，国立大学教官の31パーセントにおよんでいる。これらの助手の多数のものは大学における教育，研究，診療の最前に立ち，その活動をささえている。反面，研究費の配分，大学，学部の運営への参加などでは講師以上の研究者との間に多くの差別があり，一人前の研究者として扱われていない。又，給与体系の上では教育職一表四等級が適用され，職名等級となっているため，助手であるかぎり，上位等級へのわたりは認められない。しかも，四等級が高位号俸において昇給間差額が極端に低くなっているため助手の生活はきわめて深刻なものになっている。(図(1)参照)

これらは，助手の法的規定に依っており，実態とのちがいを明らかにするためにも，助手の法的規定をみておきたい。

学校教育法によって「大学には学長，教授，助手，

及び事務職員を置かなければならない」とし，「助手は教授，助教授を助ける」と職務内容を規定している。教育公務員特例法においては，助手は教員から除外，教育公務員からも除外されている。ただ，その施行令において「大学の教員に関する規定を準用する」とされているにすぎない。一方，給与体系では，これらの規定をうけて，人事院規則による標準職務表で教育職一表四等級の適用が等級別資格規準表によってうらづけされている。これによって教育職一表では同一職名のまま，上位等級へのわたり(昇級)はあり得ない。国立研究所における研究職のわたり，及び教育公務員特例法上同じ位置づけにある高校以下の実習助手等が教諭の等級へのわたりについて別に規定されているのとくらべて著しく不当である。

（二）助手を大学の教員として位置づけること

助手の法的規定と実態とがかけはなれていることは多くの調査結果を見るまでもない（国大協第六常置委員会資料，職組助手問題シンポジウム資料等)。これは，大学における研究教育体制が大きく変ってきたにもかかわらず，教授，助教授，助手の定数が固定化されていることに原因がある。また，それが研究教育体制の改革を大胆に進める上で障害にすらなっている。

文部省は学部又は大学院改革などの一環として助手の講師振りかえを少しづつ認めてきた経過があるが，これらはきわめて少数で不充分である。むしろ，文部省は実質的に教員としての役割をはたしている助手を教員として位置づけなおす法的改正に着手すべきである。

しかし，このことは，講座等の体制，職名等検討を要する問題があるので，当面は現行法のもとで実現可能な方法，すなわち「助手の大幅な講師への振り替え」に着手すべきである。

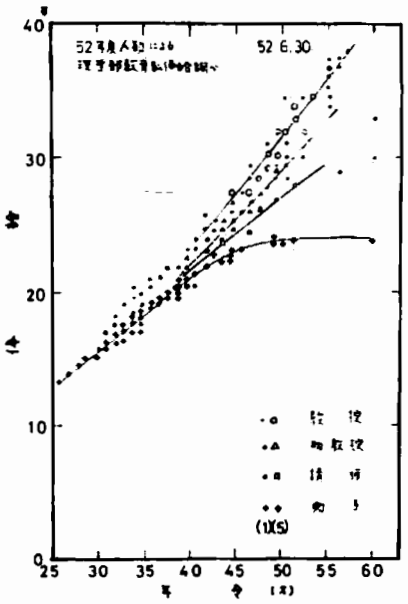
（三）具体的方法

まず，文部省は必要なところは「振り替え」を行う旨，各大学にその態度を明らかにする。各大学では，慎重な検討の末，「実質的に教員の役割をになっていることを基準」に概算要求として振り替えを要求する。

さらに，文部省は人事院，大蔵省等と協議し，定数運用の一本化を行い，定数上の措置を実現する。日教組大学部は助手をなくせと主張しているのではなく，当面は，実質的に教員の役割をになっている助手が，定数がないために昇格できないでいるものを，学長が講師に発令できるようにすべきであると主張している。

なお，この措置がとられた場合でも，大学における人事問題は大学自治の根幹をなしており，現行の運用にのっとれば乱脈な人事が行われることはない。また，この振り替えによって人事交流の停滞がますます進行するとの批判については，この問題とは別のことがらであり，助手のままでおくことによって，自然に他大学へ昇進していくと考えるのは実態にそぐわない。

最後に，この措置によっても助手は残るので，教育職一表，四，五等級(助手，教務員)給与体系は今後もなお改善されるべき問題である。



図(1)

Ⅱ　当理学部における基本的考え

（職組理学部支部助手部会）

Ⅰで示された日教組大学部の基本的考えをふまえて，この一年間当理学部支部の各教室での討論を重ねた結果にしたがって，理学部の実状にそった考えを明らかにしておきたい。

（一）理学部における実状と具体的方策

振り替えの基本的考えは，実質的に教員としての役割をになっている助手を教員として処遇できる道を開くことにある。理学部における各教室の実状から，ゼミナール，演習，課題演習・研究等に関してはすべての助手が教育上の活動を「分担」している。講義に関しては各教室ごとに大きな差がある。一つには不完全講座をかかえた小規模教室では現在の講師以上による教員組織では現実に学部，大学院における教育をまかないきれなくなっているきびしい現実があるからである。これらのことから，理学部における教員組織が講師以上の教員による構成では明らかに実状に合わなくなっている。

したがって，理学部における振り替えの問題は，助手が現実に教育活動を分担している事を積極的に評価し，正しく位置づけていく立場に立つべきである。すなわち，助手の職務は教育研究活動における技術的補助であるとの位置づけが破綻している現実を抜本的に改めるべき時にきており，大学における助手のあり方を明確に位置づけていくことにある。助手部会としては，まず，理学部において実質的に教育活動に参加している助手を教員として位置づけ，同時に研究員として位置づける。さらに積極的に教育研究活動にともなう運営に参加し得るよう道を開くべきであると考える。

こうした助手の位置づけについてはⅠ－（二）で指摘されているようにその職名を含めて法律的改正を待たなければならないし，学部，大学院のあり方の検討をも待たなければならない。その間にも，暫定的措置として，実質的に教員の役割をになっていることを基準に，すべての助手を講師に振り替える努力がなされるべきである。具体的には毎年３０名程度の振り替えを五年計画で概算要求し，その過程で抜本的に助手のあり方を検討していくよう求めているのである。

（二）振り替えにともなう検討課題

振り替えに関連して学部，教室の運営上検討すべき点がある。

(1) 講師の選考基準，及び位置づけについて各教室間でかならずしも一定した合意にはないと思われる。早急に講師の位置づけを明確にしていくこと。

(2) 年次計画で振り替えが行われる場合，やむを得ず，助手で残った者との間に，研究教育活動上で不当な不利益，差別が生じないよう配慮されるべきこと。

(3) 人事方式の問題

現行の理学部における教員選考方式を改定すべき必要はない。各教室において施行されている人事方式についても原則的には現行制度で行われるべきである。重要なことは各教室において充分な討論と合意によって措置されるべきことである。

(4) 教室運営に関する問題

振り替えの考えは，何回も述べてきたように現状を追認する措置であるべきなので，現行の運営方式で運営されるべきであるが，教室の運営形態と直接かかわるところがある。

そこでは当然，教育研究活動にふさわしい形態に改める必要がある。

これまでに，振り替えについての助手部会の考えを明らかにしてきた。以後筆者の私見を加えて補足をしておきたい。

Ⅲ

（一）組合運動としての「振り替え」

組合員諸氏の中にも，振り替え運動が組合運動の課題として積極的に評価できないとの指摘はある。確かに本来組合のとりくむべき課題は教育公務員等に関する不当な助手の規定と賃金体系を改めさす点にある。しかし，大学における助手の実体は，その法的規定にもかかわらず，永年悪条件のもとで，教育研究活動の最前線において，助手自身の努力によってつちかわれてきた評価されるべき実態と，大学自身が教育研究体制の最前に助手をすえなければならなかった不可避的な対応策によっている。こうした現実をふまえて，大学自身の内で一定の評価を確立し，自己改革の方向を示していく必要がある。結局，組合運動としては，現行の運用上の不当性を明らかにしていく中で，大学又は学部自身の改革の方向を助けるものでなければならない。この点から，振り替えの概算要求化の運動は組合運動の一面であり，組合本来の課題と相補的でなければならない。現在，振り替えの問題は各大学から文部省に対して概算要求が提出される動きがあり，文部省自身もある程度の対応策をせまられることになろう。そのとき，おそまきながら当理学部において，充分な合意なしに一定数の部分的振り替えが実現したときの危険を充分に把握しておくことは不可欠である。それは，助手問題を今後，相当期間，現状のまま固定化させる働きをもっているからである。

（二）助手のあり方について

学部において長い間，助手が実験，演習に重点をおいて教育活動を分担してきた歴史には，助手の法的規定と，実験，演習等の教育活動における位置づけについて歪曲した合意があったものと思われる。助手が学部における実験演習を分担している事実を，教育活動における「補佐」ではなく，はっきりと教育活動の「分担」として位置づけておくことが大切である。大学院においてもその通りである。

本来，教育活動において「補助的教員」はあってはならない。むしろ，教育上，研究上必要な補佐は専門の技術員として位置づけ，当然昇進の道を開くべきである。Ⅰ－(二)で指摘しているように，実質的に教育研究活動を支えて来た助手が，待遇上も，運営上も疎外されていることが若手助手の活動に障害になっているのみならず，学部における改革の障害にもなっており，大きな損失であると考える。

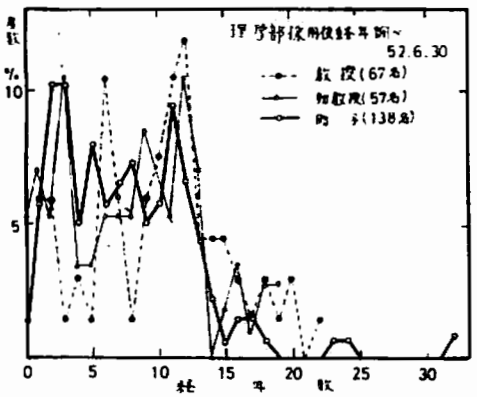
（三）振り替えが現状の改革に対して消極的対策か？

Ⅱ－(一)で指摘したように教員組織が講師以上で構成されていることが現実とそぐわなくなってきている。振り替え運動はこの現実を改革する方策としては積極的に評価できないとの意見である。この指摘はⅢの（一）に関係した組合運動のあり方にかかわるもの以外に，研究教育面での障害を強化することにはならないとの批判である。振り替えの方策自身は現状追認の策であって，積極的評価に欠ける面がある。だからこそ，我々は助手のあり方に対して明確な位置づけをするよう求めているのであり，そのことをぬきにしては大学における教官，講座等の増員，強化に対する要求も展望を開くものとはなり得ないと思われる。なお，加えれば，不完全講座の充実等の要求とは本来相補的なものであれ，相反するものではない。緊急性，要求度，実現性による順序の問題として評価されるべきものである。

最後に増員要求にかかわる問題について考えておきたい。学科目制大学，学部においては教育上，教員の不足等困難な状況にありその上，研究費，若手研究要員の不足では，深刻な状況にあり，学部の再編等の試みもなされてきている。そうした学科目制大学においても，講座制大学においても若手の教育研究活動への参加の道を開いていくという視点をぬきにしては，大学自身が生きていく道はないのではなかろうか。図(2)で典型的に示されているように昭和41～2年における大学の拡張の終りとともに教授から助手まで人的移動がいかに停滞しているかを示す一つの例と見ることができる。

これは教授一名，助教授一名，助手二名という講座制のもとで，昇進職種としての助手層の選別が行われなかったからだという見方が現実的でないことを示している。その意味では大学の拡張以後の無策が停滞をまねいているともいえる。こうした現状を改革するためには再び拡張の論理に立つのではなく，教育研究活動における人的構成，特に若手に対する正しい評価と参加の道を開いて若い血をそそいでいく立場に立つべきである。オーバー・ドクターの問題に関して提起されているティーチングアシスタントの制度もこうした立場に立ちながら，現実的な対策として評価されるべきものと考える。補助的教員という出発点ではめられた枷は再び現在の助手がかかえている問題と同じ矛盾をかかえることになるだろうが，それがまた新しい変革の力になるという評価は正しいかもしれない。

（理学部助手部会　鈴木孝夫）



図(2)

低経済成長時代の社会と大学

化学教室　丸山　和博

先日，ある大学の集中講義に行く機会があった。講義の合間の茶飲み話に，ここの大学に来る学生の出身地分布はどうなっていますかと尋ねてみた。約80％が県内で，20％が県外からという答。京都大学とは大分異なるようである。博士課程のない，この大学は決して都会といえる所にあるわけでもなく，又草深い田舎にあるというわけでもない。また，尋ねてみた。学生の気質はどうですか。実は講義している内にも，学生の反応が仲々に生き生きとしていて鋭敏に感じられたのでそう尋ねてみたのであるが，全般に純朴で良く勉強するとの事であった。さもありなんという感じ。日頃の教職員の方々の努力の並々ならぬものを感じたのであるが，最後に，こゝを卒業した学生は大体何処こに就職しますかと聞いて見た。大多数の学生が同じ県内に就職する由であるが，学生は仲々に知的好気心旺盛と見た。さて話は今年から行われる共通一次入試へと及び，受験生は大変だろうなどと話が進む内に，いわゆる有名大学に入学するメリットは何かという事になった。そこで話は学生気質に逆戻りすることになる。その大学の先生の観察によると，学生の気質も時代と共に随分と変化して来ているようだというのである。大学入試の際にはガリガリ勉強しなければ這入れないような所は敬遠して，中に入ってから良く勉強する。そうすれば社会に出ても，大した変りは無いと，どうやら大多数の学生が割切っているのではないかと云うのである。実際，社会に於いても，十年前，二十年前に存在したような学歴社会的思考がだんだん無くなって来ているようだし，学生達も敏感，且つ本能的にその点を察知し，のんびりとやっているようだという説なのである。共通一次試験もやって見ると案外うまく行って，学歴偏重社会の解消に一石を投じる事になるのではないかとの御意見でもあった。にわかに賛意のみは表し兼ねるどしても，伸び伸びと知的好気心に満ちた学生諸君の顔から想像してみても，もし，そうなれば甚だ好ましい事だと，しみじみ帰途の車中で考えた事ではあった。

さて，目を社会に転じてみると，数年前のＧＮＰ世界一と云った様な景気の良さはどこえやら，新聞その他週刊誌など，低経済生長時代の世相の一断面をいささか誇張気味に書き立てている。社長交替，部課長ポストの整理統合，企業規模縮少に伴う人員整理等々である。輸出立国を目指した我が国の世界的環境も大巾に変化した。お前の所は輸出し過ぎると，世界の国々から叱られ，今にも不買同盟でも作られそうな雲行きである。実際，先週行われた経済関係会議・東京ラウンドでは，その国の事情に応じて，ある国から輸入されてくる特別の品目について関税を高くしても良いという話に応ぜざるを得なかった。それと云うのも，我が国が近い将来，経済的，中，低開発国の追い上げで同じ立場に立たされるだろうとの臆測の下にという事であるから，将に世界は廻るなのである。

世界は廻る。では教育の場としての大学はどうか。大学としても決してその圏外たり得ることはできない。大学も廻る。ただそのテンポが違う。社会の動きを歯車にたとえるなら大学の動きは，それと噛み合ってはいるが，半径のずっと大きな歯車の廻転にたとえられるのではないか。その半径の大きさは，教育という立脚点に立った大きさでなければならぬ。柔軟な思考体系をもった思想の自由さと，高い視点に立った広い視野に支えられた半径の大きさでなければならぬ。我が国の経済社会の動きをいわば先取りする形で始まった十数年前の大学の高度生長期は今日に到って，一段落を遂げ，経済的低生長期時代の到来と共に，大学とても不変ではあり得ないし，幾分その歪みも目立つようになって来た。今日，社会の歯車は一段とその半径の大きさを縮少し，その廻転数さえも著しく落して来たかに見える。大学にあっても，その動きに合わせて歯車の半径を縮少してはという風な議論も起る。しかし，こゝが思案の仕所である。十数年前の大学の高度生長期は人為的な歯車半径の大型化であり，無理を尽くしての大型化であった。いわば，歯車の肉の厚さ，強度を無視した半径だけの大型化であり，べどべどの歯車を廻転させてのガタガタの門出であったのである。しかし乍ら，とにもかくにも社会の歯車と噛み合って廻って来た。歯車の廻転が早かった時には目立たなかった強度の脆弱さも，廻転速度の減少と共に目立ち始める。今こそ大学は高度生長期の歪み，その薄っぺらな歯車に厚みをつけ，強度を補強する秋ではないのか。社会の歯車の動きにつれて，大学の歯車もいくらかの影響を受けることはあろう。しかし，即物的な形で社会の反映が教育の場としての大学に及ぶことは文化の滅亡を招来する端緒となることを歴史は教えている。当理学部に於いても，昨今，助手の人々の平均年令の増加が目立ち始め，昨年の将来計画委員会でもそのことについての議論が繰り返され，実力ある助手の講師への昇格を目指して政府行政面への働きかけがなされようとしている。甚だ時宜を得た好ましい動きと云えよう。但し，総花的な配慮を期待した安易な動きではなく，真に教育の場の充実という観点からのものでなければならぬ。タックス・ペイヤーとしての国民及び行政面に従事する人々の十分の納得と理解が得られる形で進めなければならぬものと考える。

我が国の大学全体を見渡した時，高度生長期時代になされた，やゝもすれば安易な人事が今日になって，その歪みを露呈して来ているという一面を蔭蔽するわけには行かぬ。冒頭にも述べたように，大学を目指す若者達の意識も変って来ている。二十数年前よく云われた事であるが，地方の大学はその特色を生かした面で生長と発展を計るという目標が，今日実を結び始め，各地の大学に優秀な人材の台頭が目立って来ている。設備も当事者達の努力によって徐々にではあるが，着実に充実して来ている。いわゆる大学の平均化は着実に進んでいる。人事面でも，今こそ広い視野に立って，一大学，一教室，一講座等々の小さなユニットに限った動きではなく，全国的規模での真の人事交流が計られる必要があろう。独善に陥らぬ，教育の場の充実という観点からの活発な動きが望まれるのである。

いろいろ思うことから

植物学教室　岩槻　邦男

「評論」に何か書くようにということですが，何について書くのかというテーマは与えられませんでしたので，結構いろいろありそうな課題の中からどれを選んだらよいのか，返って迷ってしまうことになります。そんな時には，迷った挙句に，研究面で困っていることのうちで自分達の分野に限ったことではないような問題を取り上げようというのが研究

者としてごくありふれたやり口なのかもしれません。

戦後のある時期まで，厖大な数に及ぶ日本人研究者が外国の資金によって欧米へ留学しました。私自身もその末席を汚した1人としてそのことを考えねばならない立場におります。ところが最近では日本の稼ぎ過ぎが課題を賑わすようになってきました。日本人がよく働らくのだからもうけて当然だ，というような声もあるようですが，外国人からみれば少なくとも，百何十億ドルかの蓄わえができる程日本は豊かなのだというように見えるのは当り前のことでしょう。そういう数字は，取引上の残高のことだけで，もうけが国民の生活の向上にそれだけの数字に見合うように生かされていないのですから，本当に日本が豊かになったのかどうかは疑問ですが，それでももうけ過ぎたからといって，とり立てて必要でもないものの買い出しをしているという現実からみれば，外国人が日本の豊かさに期待するのを無視することはできないでしょう。学会やシンポジウムを日本でやってほしいという希望は大抵の分野で聞くことのようですし，実際日本でそのような会合の開かれる機会は多くなってきました。しかし，欧米の事情と比較してみたら，国際学会やシンポジウムを開くために費す研究者の労力は相当なものがあります。それは，金集めが大変であるということだけでなく，外国人研究者を迎えるだけの態勢が，研究室内の設備から宿舎に至るまで，どれをとっても，欧米に比して格段と劣っているところにも原因があるのでしょう。京都大学でも，事務局に国際主幹が設けられたり，国際交流委員会が作られたりして，国際交流に積極的に取り組む体制が整えられつつあることは評価されることですが，今のところ返っていろいろの制度が厳しくなっているだけで，実際に交流の促進に目ざましい効果が表われていないのは残念なことです。性急になってはいけないことでしょうが，私などが経験しているのはコノエホールの使用の申請の手続きが滅法面倒になったということくらいです。

私共の分野では，多様な生物を対象とした研究をしますので，研究用の資料標本は不可欠のものです。事実，系統進化学など自然史関連の研究に大きな貢献をしている欧米の研究機関ではどこでも，たとえばUniversity Museumなどの，非常によく整った設備をもっております。外来研究者は，その Museum の中に研究用の設備の整ったスペースを与えられ，資料標本を有効に利用します。京都大学の自然史資料標本も，研究活動の高まりによって質量共に格段の充実をみるようになり，私が直接知っている植物に関していえば，東亜の植物を対象として研究する人は，京大の資料標本を見ないで済ます訳にはいかない程になっています。ですから，標本の借覧の申し出は引きもきりませんし，京都へ来たいという希望も続々申し出られております。しかし，京都へ誰かがやって来ますと，標本箱を最大限詰め込んだ標本庫の迷路を通って抱えられるだけの標本を運び出して，空いているどこかの部屋の片隅で，せいぜい実体顕微鏡位を使ってコソコソとのぞいてみて，ここで問題を解決するというよりは借りて帰る標本を選び出すだけといった状態の何日かを過ごすことになります。自分が欧米の研究機関で与えられる待遇との落差の大きさはいうのも気恥ずかしい程です。そして，大概の外来研究者は，最後になって控え目に，日本は豊かなのにどうしてUniversity Museumを作ってもらわないのかといい出します。札束ではち切れそうな鞄をもっている人が，空腹で真宵になっているのをみて，どうしてレストランへ行かないのか，といぶかしがるようなものなのでしょう。

研究者の交流が，研究者が出入りして握手をし合うだけで終ってしまうのでは残念なことです。共通のテーマについて論じ合い，共通の研究対象について具体的に触れ合うことが充分行なわれるためには，しかし，高いホテルに泊って手持ちのドルが雲散霧消するのに気を使ったり，あっちとこっちの片隅でお互の顔も見えないような状態で資料を扱かったりしていたのでは，余り効率の良い成果は望めそうにありません。しかし，日本の研究者が，そういう面で欧米の研究者にコンプレックスを持たねばならぬ日はまだしばらく続くのでしょうか。

環境問題の根

動物学教室　田隅　本生

さして広くもない大学の構内に十数年前から大きな建物が急にふえた上，自動車が無暗に多くなったため，構内はどこへ行ってもゆったりした雰囲気が失われてしまった。その中でもとりわけ理学部の状態は無惨である。車の振舞いは無軌道そのもので，

おかげで歩行者や自転車利用者は構内を安心して通行することもできぬ有様となっている。また地面は未舗装のまま放置されているから，砂ぼこりとぬかるみに悩まされる。

こうした状況に対して，理学部ではようやく昨年から環境保全問題委員会がこの領域の事柄を取扱うことになり，それと並行して全学安全委員会でこの問題の対策が検討されるようになった。現在，同委員会で具体的な立案が行われている由である。遅まきながら，また交通問題だけに限るにせよ，こうした動きが現われたのは頼もしい限りだが，解決策が実施されるまでには幾多の難関があることと思われる。

というのは，事態を解決する必要に迫られていることばかりでなく，なぜこれまで放置されてきたかに思い至るからである。直接の原因は大学の無責任体制にあるということになるが，根はもっと深く，歴史的・精神的なものであるらしい。これまで，環境改善について何か提案がなされた場合，反対論ないし消極論に出あって行き悩むことがしばしばあった。その論は，何もせずに成行きに任せておくのが一番だというきわめて日本的・情緒的な考え方と地域エゴとに集約できそうである。私は環境問題に明るい者ではないが，常識的に想像すると，外国（先進国）では身近な環境の整備などということは，精神的にも物質的にもとうの昔に獲得ずみのことであり，そのような基礎の上に立って工業汚染など高次の問題に取組んでいるのだろう。ところがわが国では，環境問題について基礎的なものは個人的にも社会的にも何も修得されず，関心ももたれないまま，汚染などの問題に直面してしまったのである。関心がもたれないわけは，われわれの心に特徴的な無常感に根ざす冷淡さと己れ一個のほかは顧みる余裕をもちえない心の狭さや荒廃に求めてよさそうである。大学が今のような体制にとどまる限り，万人の共有物たる大学を満足に機能するものとして成り立たせていくには，大学人の一人一人が社会性と合理性に富んだ考え方を身につけることが何よりも肝要なことと思われる。

編　集　後　記

「本号」では，「助手の講師への振替え」の問題を中心に扱いました。倍増計画後10年を経て，大学は，内部的には紛争を経験し，外部的には，オイルショックによる社会の大ゆれにもまれ，大きな後遺症をかゝえながら今日に到っている。いくつかの改革の試みはあったが，中途半端に終ったものが多く，また，手直しを必要とするものも少なくないが，そのエネルギーをどこに求めるべきなのか。

助手層の高令化と疎外，人事の停滞，定員削減はどこまで行くのか。財政における行詰り，留年生の増大とO.D.問題の深刻化，等々。

大学はいま，いろんな側面において閉塞状況をかゝえている。このような状況にまどわされず，"大学は孤高を求めて研讃に励む"というのも一つの見識であろう。他方，新たな拡充計画に期待を寄せ，南山城学園都市構想の動向を見守っているむきも少なくない。大学が更にマンモス化へ進むことによって，自律機能を失い，死滅へ向うおそれ無しとは云えない。

このような時期にあたって，理学部の将来計画を論ずるのは大変むずかしい問題だが，どちらかといえば，地道な内部的調整と改革を重ね，エネルギーを蓄積すべき時期ではなかろうか。将来計画委員会においては，"大学院のあり方"をめぐって論議されたが，「助手の講師への振替え」も，地道な努力の一つとみることができるのではなかろうか。

各位の討論に資するなら幸である。

編集責任

京都大学職員組合理学部支部

教官部会世話人会

代表　西尾英之助